

## GNOMES



通勤の途中に消防署でズボンがまとわりついた長靴が整然と消防車の脇に並んでいるのを見た。そして納得した。そりゃーそーだ。ズボンをはいてから長靴を履いて、その中にズボンのすそをきっちり入れるなんて手間がかかって仕方がない。だれが考えたかなと思ったが、やっぱり男達だろう。しかし実にいい案だ。もしかしたら酔っぱらって帰った翌朝玄関を見たらそうになっていたのかもしれない、それを恥じ入るかひらめくかという差は大きい。

自由なひらめきとしたりめきについて考えていた。私がい

いろいろな計画を立てるときを考えてみると、ほとんどの時間をコンピュータの前で過ごしているけれども、コンピュータの前だけでやった計画は着実に美しく出来上がっていくのだが、思考のひらめきとか飛躍やあつと思ようなジャンプが足りない。それは便利な道具にヒトが飼いな

らされてしまっているからではないか。ヒトの心は道具に飼いな

らされてはいけないのではないか。ヒトは真っ白な紙を前にして鉛筆を一本持って手の動きと頭の動きが互いに刺激しあ

いながら考えたり創りあげたりするくらいがちょうど良いのではないだろうか。もう少し後の世代はコンピュータが何の抵抗もなく紙と鉛筆になるの

だろうが、私の世代はまだ無理のような気がする。そんなこんなと

考えて、あと3回まで迫った雑誌の原稿の題材を今月は

図面の書き方であったものを途中でぐっと縮めて急遽「手書きで考えを表現しよう、まず鉛筆をにぎろう」とシフトしてしま

った。どうせあの雑誌を見る人たちは図面のことはプロなのだ

と自分で納得した。しかし、このごろ本当に真剣にものを考

えているだろうか(金策は別として)

そういえばものを考えるという点で久しぶりに読んで良かったと思

えた本に出会った。文春文庫で「喪失の国、日本」M.K.シャルマ、書

いた当時はインドから日本にはじめてきたエリートビジネスマン

であった彼がインドで辞令を受けてから日本で過ごした1年8ヶ月

を綴ったものだったが、さて何に惹かれたのか、彼を取り巻く

日本の中高年の人たちのまっとうな英知と、インドの歴史を背負

った青年の肩に力を入らない明晰さ、日本とインドで出会う事象

に対する的確で構造的な解釈と意見、そして、全編に流れている

風が抜けていくような爽やかさであったか。インドの青年はこれ

ほど論理的で、水晶のような透明感をもった温かさにあふれて

いたのかと、改めてうれしくなった。そして訳者が中身が読め

ないながらいつか読んでみたいと何年も前にたまたま見つけた

本を持って歩いていた時に、インドの田舎の古城で呼びかけら

れた紳士がたまたまその作者だったという出会い。その、日本

から帰ってから一線を退いて穏やかな毎日を過ごしているその

考え方の心地よさが、風が抜けるように自分を見直す鏡のよう

に感じられて良かった。

6月の「まなざし」の編集は19日におこないます。少ないながら丁寧にやろうと思っています。手伝いのかたはよろしくお願

いいたします

<http://www.interq.or.jp/japan/gnomes/gnomes1>

TEL/FAX 03-5600-0195

高村 哲

GnomesJpn@aol.com